

巻頭言(宇野重昭先生を追悼して)	1	NEAR Recommends	12
新任研究員紹介	2	NEAR 短信	13
回顧と展望	5	研究員の研究活動の成果	13
北東アジアの研究最前線	11	NEAR センター市民研究員の活動一覧	13

宇野重昭先生を追悼して

NEAR センター研究員

副学長・大学院北東アジア開発研究科長 江口 伸吾

2017年4月1日、宇野重昭先生がご逝去された。宇野先生は、改めて申し上げるまでもなく、2000年に開学した本学の初代学長を務められ、そして2007年の大学法人化の際には初代理事長にも就任され、本学の建学の土台を築くとともに、その発展に多大なご貢献をいただいた。また、2009年にご勇退された後も、本学の名誉学長、名誉教授、そして北東アジア地域研究センター名誉研究員として、常日頃から私たちを導いて下さった。私は、4月3日に開催された本学の入学式の時に先生の訃報に接したが、突然の出来事に半ば茫然としながら、その場をやり過ごすことしかできなかった。

私は、1990年に成蹊大学法学部の宇野先生のゼミナールに入門して以来、先生のご指導を仰いできた。当時、先生は、学内外で多くの要職に就かれ多忙を極められていたが、私たちゼミ生との交流を大切に下さり、先生の厳しくも温かいお人柄に触れた多くの学生は、自然に先生の下に集った。また、2000年の本学開学の際、私は、学長室付きの専任助手として先生をお手伝いすることとなり、教育、研究、行政、社会貢献といった多岐にわたる先生のご活動に間近で触れ、そのエネルギーに圧倒された。

宇野先生の思い出は尽きないが、私にとって最も強く印象に残っていることは、先生は常に誰よりも厳しく自らを律しながら、

新しいことに挑戦し続けられてきたということである。開学当初に70歳の古希を迎えられてなお、故郷の島根に理想の大学を作ることを決断されたこと自体がそれを最もよく象徴しているが、開学以降もその挑戦は続いた。それは、地域に生きる大学として、市民、教員、職員が毎月1回集い、先生がご退任されるまで計50回も開催されたアカデミック・サロン、また2006年に創設された市民、大学院生、教員が共同研究を行うという全国的にも他に類をみないNEARセンター市民研究員制度などがあげられる。

そして、何よりも重視された挑戦として、北東アジア学創成という学術的な試みがある。すなわち、日本海を介して北東アジア諸国と直接向き合う島根の地理的環境を活かし、2000年に設置された北東アジア地域研究センター、2003年に開設された大学院北東アジア研究科、並びに同開発研究科(2009年に北東アジア開発研究科に改組)、そして北東アジア学の学問体系を打ち立てようとする『北東アジア学創成シリーズ』(全7巻、国際書院)の刊行といった一連の試みである。2012年に宇野先生が執筆された第1巻『北東アジア学への道』が上梓されたが、未だ全巻刊行までには至っておらず、その完成を待ちわびていた先生に対して、私たちは悔恨の念をもって残された課題に取り組まなければならない。

また、宇野先生は北東アジア学創成の実践として、国際交流を積極的に推し進められた。本学が比較的小規模な地方の公立大学であるにもかかわらず、先生は、在任中、米国、中国、韓国、ロシア、モンゴルの計12大学と次々と交流協定を結び、先駆的に北東アジア地域を中心とする大学間交流の国際的ネットワークを構築された。とりわけ中国の北京大学国際関係学院、復旦大学国際問題研究院とは定期的に合同シンポジウムを開催し、不安定化する北東アジア地域秩序の変動期において、自由な意見交換を行うまでに信頼関係を深めた。先生は、ご退任後もこれらの学術交流に参加され、しばしば北京を訪問されたが、一生涯を現役の研究者として全うされた先生のお姿は、



2014年9月8日、北京大学国際関係学院に於ける座談会でご発言される宇野重昭先生

後進の私たちにとってかけがえのない導き手であった。

このように振り返ると、宇野先生が、ある時、「僕は老いても未来に参画し続ける」と、静かに、そして固い信念をもって語られていたことが思い起こされる。それは、先生が培われてきた歴史観に大きく由来するであろう。成蹊大学の宇野ゼミで最初に読む文献は、E. H. カークの『歴史とは何か』である。この本は、歴史とは過去の客観的な事実として存在しているのではなく、むしろ現在と過去との不断の対話を通して、未来の新しい社会を建設するために解釈される動的な知的対話の営為として描かれ、時間的にも地理的にも烈しい変化の只中にある近代世界がどこに向かおうとしているのか、それを究明する歴史家の責務を問うている。

宇野先生は、病床のなか、この『歴史とは何か』の原書と訳書の二冊を最期まで枕元に置かれていたとお聞きした。私たちはこれから宇野先生が遺された教えと対話しながら、それを如何にすれば未来へと受け継ぎ伝えていくことができるであろうか。この問いかけは、宇野先生から私たちに託された最期の課題であると肝に銘じるとともに、これまで長きにわたりご指導を賜った先生に、心より感謝申し上げます。

新任研究員紹介

《NEARセンターは、2017年4月より新たに2名の新任研究員を迎えました。研究員のお二人、濱田泰弘研究員と渡辺圭研究員をご紹介します（編集部）》



NEARセンター研究員 濱田 泰弘

2017年4月よりNEARセンター研究員および島根県立大学総合政策学部准教授に就

任致しました濱田泰弘と申します。今回は自己紹介も兼ねて私自身の学問的関心の端緒と研究の歩みについて述べたいと思います。

大学時代は今と違って自由奔放な生活を過ごすことが出来ました。オートバイで北海道一周旅行をしたのが一番の思い出でしょうか。それと読書。学生時代に出会い衝撃を受けた二冊がありました。一冊はドストエフスキー『罪と罰』、もう一方が丸山真男の『現代政治の思想と行動』です。後者は東京発大垣行き長距離列車の中で貪り読んだことを鮮明に覚えております。自分がやりたいものを見つけられた気がした、そんな瞬間でした。

丸山真男の影響を通じ大学時代に抱いた学問的関心とは、「なぜカント的〈啓蒙〉主義の伝統を持つ文化大国ドイツでナチズムという〈野蛮〉が生まれたのか」という問いでした。奇しくもフランクフルト学派、アドルノ・ホルクハイマーにより問われた主題です。大学院で本格的に政治学を専攻するに当たり私はナチズムに抵抗したドイツの亡命知識人の知的営為を研究対象とする手法を取り「ドイツ教会闘争」に関わったG・ライプホルツの抵抗権論について修士論文を執筆しました。

博士課程進学後、亡命作家トーマス・マンの政治評論を主戦場に移しました。ノーベル賞作家として知られる彼ですが、日本において彼が遺した多くの政治評論は体系的に研究されてきませんでした。当初の問いに対して彼の政治評論から以下の回答が導出されるでしょう。「特殊ドイツ的な精神、政治的未成熟性、非政治的精神はデモクラシーという西欧的〈妥協の所産〉への抵抗を生み出しヴァイマル民主主義の崩壊とナチス台頭を導いた」という分析です。「政治という妥協」への蔑視は、政治的決断主義を正当化し議会制民主主義における妥協や合意形成の拒否にも通じる。それはゲーテが『ファウスト』で描いた政治的ニヒリズム、悪魔との契約に至り得る・・逆に言えば市民の能動的な政治参加と政治文化の成熟が戦後ドイツの課題となる。ドイツ民族は悪

魔とも契約し得る一方で良心に訴えることもできる。彼が指導した市民の政治的成熟、政治的な責任倫理、絶えざる自己省察、これらは現代のデモクラシーに対してもアクチュアルな警告となり続けるでしょう。

学位論文を準備するにあたり膨大な文献と格闘することになりました。文献収集も兼ねて訪れたトーマス・マン・アルヒーフはチューリッヒのスイス連邦工科大学にありますが、休館日にも関わらずご厚意で入館許可を頂きました。そこには彼の晩年の書齋が再現されており直筆の草稿も手にすることが出来て感慨を覚えました。またノーベル文学賞受賞対象となった『ブッデンブローク家の人々』に描かれた故郷の実家が記念館として残されており、生前の講演テープや書簡、日記等当時は入手が難しかった文献も入手することが出来ました。

そのような研究に対する自分なりの成果が成蹊大学大学院に提出した政治学学位論文『トーマス・マン政治思想研究—「非政治的人間の考察」以降のデモクラシー論の展開—1914—1955—』（国際書院、2010年）です。拙著では二つの世界大戦とヴァイマル時代、冷戦時代に至る彼の政治評論を再構成し、彼のデモクラシー論に連続的、段階的な発展を持つ政治思想的体系があることを明らかにしました。特に晩年の彼は現在のEUに近いヨーロッパ連邦を構想していたことが興味深く思われます。彼の政治的審美眼は評価に値するように思われます。

学位取得後は東京で成蹊大学等の非常勤講師等をして研究を続けて来ました。

そんな折、2011年外遊から帰国直後に東日本大震災を東京都中野区（震度5強）で体験しました。瓦礫撤去のボランティアで訪れた被災地（石巻市）で目の当たりにした自然の圧倒的な驚異に、文明の営みの脆さと儂さを感じました。原子力発電所事故という未曾有の人災を前に、社会科学を学ぶ人間はどのような回答を果たし得るか。この問いに対する自分なりの選択肢が環境法という学問でした。その後大学院に再入学し、ゼロから環境法を学び始めました。修士論文として「ドイツ原子力発電所多段

階許可手続における市民参加一聴聞と排除効を中心に一」(早稲田大学大学院法学研究科 2015 年提出)を執筆しました。博士後期課程に進学し、現在は高レベル核廃棄物最終処分場選定に関する参加手続を研究しております。これは日本の最終処分場選定問題や東アジア各国においても共通する今後の課題となるでしょう。脱原発の先人であるドイツから学ぶべきことは多いはずです。

主にドイツ研究者として歩んで来た私ですが、今回の着任を契機としてドイツ研究者という視点も逆に活かしながら島根県立大学 NEAR センターの研究活動に尽力して参りたいと切に考えております。今後ともよろしくお願い申し上げます。



NEAR センター研究員 **渡辺 圭**

本年4月より助手として着任した渡辺圭です。東京生まれの東京育ちですが、私の実家のある日野市は緑が多い所です。現在はさらに自然の豊かな環境で働かせていただいております。この度の採用には心から感謝しております。昨年までは、ロシア語とユーラシア文化担当の非常勤講師として、千葉大学に勤務していました。非常勤講師時代の6年間(2011～2016年)は、ユーラシアという地域、ロシアという国家、ロシア語に対する学生たちの関心が、歴史、文学や思想といった通時的な位相から、和食ビジネスやアニメキャラ等の即時的な位相へ移行していくのを目の当たりにしました。

私はロシア正教会の歴史と神学を研究しており、東方正教会の伝統的祈祷法「イエスの祈り」に内在する思想を専門にしております。私はソ連邦崩壊後、ロシアが計画経済から市場経済に移行していく混乱期に

大学生活を送りました。しかし、私の関心は政治経済よりもむしろロシアの「精神文化」に向かっていきました。そのきっかけになったのが、アメリカ文学史上の傑作と誉れ高いサリンジャーの小説『フラニーとゾーイー』です。この物語では、精神のバランスを崩したフラニーという女子大生が救いを求める対象として、『巡礼者の告白物語』という宗教書が登場します。同書は、ロシア正教会の基本的啓蒙文献であり、無名の巡礼者が「イエスの祈り」の修行に邁進し、シベリアをはじめとする聖地を行脚するロード・ストーリーになっています。私は『フラニーとゾーイー』を通じて初めてロシア正教に触れました。

「イエスの祈り」とは、「主、イエス・キリスト、罪人なる我を憐れみたまえ」という特定の祈りの文言を際限無く反復する東方正教会の伝統的祈祷法です。この祈りは、砂漠で40日間断食をしたイエス・キリストのひそみに倣い、エジプト等の荒れ地で修行を積んだ「砂漠の師父たち」に起源を持つと言われていています。ロシアにおける「イエスの祈り」の実践については、中世の修道士たちの手による写本にすでにその記述が見られます。ドストエフスキー、トルストイが訪れたことで知られるコゼーリスクのオープンチナ修道院の長老たちは、「キリストを模倣する偉業」を行ったと伝えられており、彼らは皆「イエスの祈り」の実践者でした。大学院生時代は、この祈りの歴史をビザンツ帝国から20世紀のロシアまで通史的に研究しました。

ロシア正教会では、20世紀の初頭に、「イエスの祈り」の唱句に含まれる「イエス・キリスト」という名前そのものが神である、と考える修道士たちが登場し、教会側はこれを異端と見做します。現在「讃名派」と呼ばれるこの修道士たちについては、日本ではまだ研究の蓄積がなく、私はこれを博士論文のテーマに選び、2010年9月に論文審査を通過しました。

フラニーと同じ年頃にロシア正教と出会った私も中年になり、こうしてNEAR センターに勤務しております。当センターは

タタールスタン共和国と提携がありますが、『巡礼者の告白物語』の初版が共和国の首都カザンで刊行されたことには因縁めいたも

のも感じます。一冊のサリンジャーの文庫本が私をここまで導いてくれました。

回顧と展望

(NEARセンター研究員 2016年度研究活動自己点検)

《NEARセンター研究員(2016年度から所属継続)が、過去1年間の研究活動を振り返り、今後の展望を語ります(編集部)》

NEARセンター長 **井上 厚史**

2016年度は、以下の調査及び研究をおこなった。

- (1) 【論文】「オーティス・ケーリと戦後民主主義」、『石見タイムズ』復刻版別巻、三人社、10-26頁、2016年5月
- (2) 【論文】「西周とヘーゲル—「性法」と「利」をめぐる考察—」、島根県立大学北東アジア地域研究センター『北東アジア研究』第28号、13-34頁、2017年3月
- (3) 【解題】「反逆者は誰か」、『石見タイムズ』復刻版別巻、三人社、64-66頁、2016年5月
- (4) 【翻訳】朴忠錫(飯田泰三監修 井上厚史・石田徹翻訳)『韓国政治思想史』、法政大学出版社、2016年9月
- (5) 共著『韓日相互認識と善隣の道』、景仁文化社、2016年4月
- (6) 【学会発表】「元朝儒学と朝鮮儒学—『性理大全』と『四書章句』の分析を中心に—」、朱子閩學與亞洲文化高峰論壇、2016年12月17日
- (7) 【学会発表】「朝鮮と日本の自他認識—13・14世紀の「蒙古」観と自己認識を中心に—」、人間文化研究機構「北東アジア地域研究推進事業」島根県立大学NEARセンター拠点プロジェクト「近代的空間の形成とその影響」第1回国際シンポジウム2016、2016年11月19日

○人間文化研究機構「北東アジア地域研究推

進事業」が正式に始動し、多忙な一年となった。少人数スタッフで、NEARセンター企画の運営に加えてNIHUの事業もこなすことは大変な負担であり、他のNEARセンター研究員の協力なくしては不可能なことである。みなさま方のご理解とご協力を切にお願いするところである。

○来年度は、NIHU事業の継続的運営、および『原典朝鮮近代思想史』全6巻(岩波書店)の第1巻編集協力者として引き続き出版に向けて尽力したいと思っている。

NEARセンター副センター長 **福原 裕二**

最初に宣伝を一つ。NEARセンターの三大(?)研究会の一つである「日韓・日朝交流史研究会」は、昨年度末現在で、足かけ12年、46回に涉って開催をし、延べ5か国(日・米・中・韓・独)、115名の方々に研究報告を行っていただいた。今年度計画通りに4回の開催が行われれば、50回を数えることになる。この研究会は、学術的な立場から幅広く日韓・日朝関係の歴史とそれをめぐる国際関係を分析することを通じて、「北東アジア学」創成の一端に寄与することを目指している。事実、その成果は北東アジア学創成シリーズ(第2巻)に取り込まれているほか、院生・市民の参加を得ることによって、諸方面に知的還元されている。まずは50回目の開催を通過点として目指し、全国的に評価されているNEARの北東アジア研究のさらなるレベルアップに貢献したいと思っている。みなさま、ご参加をお待ちしています!

さて、昨年度は上記の研究会や「心の問題」勉強会(ほぼ毎月開催)、「北東アジア地域研究推進事業」の北大スラ研拠点スタートアップ学術会議(詳細は本誌第50号)、朝鮮での学術意見交換会(詳細は本誌第51号)など、

研究集会の開催・運営に多忙な一年だった。とはいえ、ロシア・カザンでは現地の朝鮮民族文化自治協会の会長さんに面談し、約1,000人の朝鮮人コミュニティの現状を伺うことができたほか、朝鮮では「地方」の人びとの暮らしを、中国と韓国では南シナ海・日本海をめぐる喫緊の漁業問題の舞台裏を見聞きするなど、今後の研究に資する多くの知見を得た一年でもあった。さらに、朝鮮社会科学院の研究者と市民研究員の労作を『北東アジア研究』（第28号）に掲載できたことは、「地の拠点」としてのNEARの形成にささやかながら貢献できたかなと感じている。ただ、その分自らの執筆活動が滞りがちとなってしまった。反省、反省…。

今年度は、9月初旬と10月下旬にそれぞれモンゴル科学アカデミー・東北大学で開催される国際シンポでの研究報告を差し障りなく行うこと、今年度から新たに活動がスタートした「(北東)アジアの環境問題」研究プロジェクトを軌道に乗せることが目下の課題である。いずれの調査研究も、私にとってはチャレンジの要素が濃厚だが、次年度の回顧には業績として記載できるよう全力で取り組んで行きたいと考えている。



在カザン朝鮮民族文化自治協会の金ドルフ代表さんと私（2016年8月5日）。



朝鮮社会科学院歴史研究所との学術意見交換会後の集合写真（2016年11月3日）。

NEAR センター研究員 石田 徹

2016年度の研究活動はおおよそ以下の通りである。

- ①「前近代日朝外交における「訳官使」の基礎的研究」：2016年度も宗家文庫史料の調査収集に努め、韓国国史編纂委員会（8月27日～9月10日、翌年3月17日～25日）、長崎県対馬歴史民俗資料館（9月12日～19日）での史料調査・収集を行った。
- ②8月6日にロシア・タタールスタン共和国で開催されたロシア・タタールスタン共和国科学アカデミー Sh. マルジャンニ記念歴史研究所・島根県立大学共催国際会議「日本とタタール世界の文化的、経済的、技術的な関係と連携：歴史と現在」において、「北東アジアにおける対馬の位置づけ」と題する報告を行った。また、この報告を承けて、翌2月に長崎歴史博物館での史料調査・収集を行った。
- ③前年度に引き続き、学長裁量経費による共同研究（「幕末～明治前期における知的情報の流通状況の把握とそのデジタル・アーカイブ構築—隠岐・宇野家の場合」）を通じて、故宇野重昭本学名誉学長所蔵の古文書の整理とデジタル撮影、ならびにそのアーカイブ化作業（宇野家文書デジタルライブラリー）を進め、作業はひとまず完了した。URLは<http://near-archive.jp/>である。
- ④NEAR センターでの出張：2016年8月2日～10日の日程でロシア・タタールスタン共和国を訪問し、カザンにおける正教とイスラム教の共存状態についてのインタビューや見学の他、世界遺産となっているボルガルの見学に参加した。
- ⑤朴忠錫『[第2版] 韓国政治思想史』の翻訳出版がようやく成就できた（飯田泰三監修；井上厚史・石田徹共訳：法政大学出版局、2016年9月刊 ISBN:978-4-588-62532-9）。

2017年度の展望として2点挙げておく。

- ①「前近代日朝外交における「訳官使」の基礎的研究」：昨年度に引き続き、宗家文庫の史料調査・収集を中心に研究を進めるが、今年度から長崎県対馬歴史民俗資料館が一時休館となってしまったため、対応を練っている。

- ②人間文化研究機構による北東アジア地域研究プロジェクトの拠点メンバーとして、拠点の掲げるテーマ（北東アジアにおける近代的空間の形成とその影響）をめぐって、対馬を中心とした研究を行う。目下18世紀を中心とした史料に取り組んでいる。

NEAR センター研究員 **佐藤 壮**

2016年度は以下の研究活動をおこなった。

- 北東アジア地域学術交流研究助成プロジェクト「中国の『周辺外交』の展開と日中関係の再構築—北東アジア地域秩序の構造変動の文脈のなかで—」（研究代表：江口伸吾 NEAR センター研究員）に参加し、2016年9月に北京大学国際関係学院の研究者（王逸舟副院長、梁雲祥教授、帰永濤副教授）と中国の周辺外交の現状に関するインタビュー調査をおこなった。インタビュー内容については、本ニューズレター第51号（2017年3月）で簡潔に紹介したのでご笑覧頂きたい。また、2017年3月には、復旦大学国際問題研究所の研究者らとの研究会に参加した。
- 学長裁量経費による個人研究「国際秩序をめぐるグローバル・アクター中国の単独主義・二国間主義・多国間主義—中国外交の国際実践理論分析—」で文献調査・資料収集をおこなった。研究成果は、2017年度中に論文として公表する予定である。
- 福原裕二・NEAR センター研究員が主催する「北東アジア国際関係における“心の問題”プロジェクト」の一環で朝鮮社会科学院との学術交流（2016年11月）に参加し、「歴史認識問題と北東アジア国際関係—移行期正義論の観点から—」と題して報告した。
- 学長裁量経費による共同研究「近代国家と立憲民主政」（研究代表：岡本寛講師）に共同研究者として参加し、その一環で島根県立大学浜田キャンパス公開講座に登壇し、「立憲主義と安全保障」と題して講演した（2016年6月8日）。

今年度は、上記江口プロジェクト「中国の周辺外交」に継続して参加し、「一带一路」やアジアインフラ投資銀行に代表される周

辺外交を、経済的地域主義と安全保障が交叉する観点から分析を加えていきたい。また、2016年3月に北京大学国際関係学院の研究者を招いて開催した合同国際シンポジウム「国際秩序をめぐるグローバル・アクター中国の「学習」と「実践」」の成果を編著書として出版予定である。

NEAR センター研究員 **井上 治**

平成28年度は、財団法人東洋文庫（4月：チベット文字表記モンゴル商人台帳、12月：「アルタン・ハーン表文」関連ポズドニエフ論文、2・3月：『華夷訳語』）、ロシア科学アカデミー東洋文献研究所（2月：「アルタン・ハーン表文」）で目的の資料を調査し、それに基づく研究論文を今年度寄稿した。フィールド調査は、8月に中国河南モンゴル族自治州で行われているモンゴル語回復のためのサマースクールを、市民研究員と一緒に実見調査し、帰途、市民研究員が研究している能海寛のチベット行程の一部を跡づけることに協力した。地域文化に関わる活動としては、近年舞われなくなった元寇に由来する石見神楽の演目「風宮」の鑑賞会を5月に開催した。この機会に、日本側史料に見える風宮に関する記述の一部を紹介し、ことに江戸期の大元神楽台本にこの演目が書き残されていることが重要であることを解題として述べた。NIHU プロジェクトの拠点メンバーとして、8月にはタタールスタン共和国カザン市でタタールスタン共和国科学アカデミー歴史研究所との共催学術会議で報告し、11月にはNEAR 拠点の国際シンポジウムでも報告を行った。前者の成果は後出の論文（「ブリヤート人歴史家はロシアとモンゴルをどのように描いたか」）として、後者は平成29年度科研費採択につながった。また、学長裁量経費をうけてモンゴル諸語研究会を18回開催し、西部モンゴル諸語に関する基本的な研究に採られた語彙やセンテンスのラテン字転写表記を再検討して、統合グロッサリーのプロトタイプを作成した。執筆活動も例年と変わりなく行ったが、寄稿した「地方文書に見る清末モンゴル西部のカザフ人」、「ブリヤート人歴史家はロシアとモンゴルをどのように

描いたか]、「日本におけるオロン・スム遺跡出土モンゴル語文書の近年の研究状況について」はすべて寄稿先での刊行作業が不調なために公刊に至らなかった。例年に比べると、新規に開拓した研究テーマに関わる活動と成果が上がった実感はあるが、執筆物が公刊に至っていないことは残念である。平成29年度は、NEARセンター研究員が不得意な市民研究員との共同研究に乗り出すこと（現在順調に活動を展開している）、執筆が遅れているいくつかの依頼原稿に何とかして応えたいと思っている。

NEARセンター研究員 **江口 伸吾**

2016年度は、現代中国の外交と内政、並びに両者の関連性について研究を進めた。とくに、13年10月の「周辺外交工作座談会」を契機に展開された周辺外交、また13年6月の「群衆路線教育実践活動工作会議」を契機に進められた大衆路線と党・国家ガバナンスの改革の諸動向に焦点を当て、習近平政権の中国政治外交の特質を多角的に考察した。以下に、その活動を振り返る。

第一に、中国の周辺外交に関する研究を始めたことである。とくに、「中国の『周辺外交』の展開と日中関係の再構築－北東アジア地域秩序の構造変動の文脈のなかで－」（研究代表、北東アジア学術交流研究助成金、16年4月～18年3月）の共同研究プロジェクトの下、16年9月、北京大学国際関係学院を訪問してインタビュー調査を実施するとともに、現地での資料収集を実施した。王逸舟教授（北京大学国際関係学院）をはじめとする諸先生方へのインタビューでは、「一帯一路」構想の提起にみられる中国外交の今後の行方が注目されるなか、国際政治における中国の影響力の増大が大国外交の位置づけを高める一方、近隣諸国との安定的な関係を構築する周辺外交との外交政策上のバランスもかつてないほど求められていることが指摘された。

また、このプロジェクトでは、北京大学国際関係学院、復旦大学国際問題研究院との学術交流を通して、研究協力の国際的ネットワークの構築を進めた。とくに、17年3月

21日、石源華教授（復旦大学国際問題研究院・同大学中国与周辺国家関係研究中心）、于鉄軍副教授（北京大学国際関係学院・同大学国際戦略研究院）のお二方の先生を本学にお招きして、「中国の周辺外交と北東アジア地域秩序の行方」と題するワークショップを開催した。このワークショップでは、江口伸吾「中国の周辺外交の展開とその行方」、石源華「中国の周辺外交と北東アジア地域の新秩序」、于鉄軍「中国外交政策の国内要素」の研究報告があり、その後意見交換を行った。

第二に、現代中国の大衆路線にみられる内政の変化の動向、並びにそれが外交に与える影響について考察した。習近平は、12年11月の党総書記に就任した際に「人民は歴史の創造者であり、大衆は真の英雄である」と述べ、その後、習近平政権の特徴の一つとして大衆路線が強化されたが、党－大衆関係の再構築を通して中国型の国民統合としての「人民」統合が試みられ、この結果、ナショナリズムに影響され易い対外関係の国内基盤が形成されつつあることを明らかにした。なお、本研究の成果として、「現代中国における国内政治の諸動向と対外政策へのインプリケーション－『人民』統合の過程を中心に－」を執筆し、佐藤壯編『グローバル・アクター中国の「学習」と「実践」－外交・内政の共振と歴史の視点から－』（仮）（国際書院、2018年刊行予定）に投稿した。

17年秋に開催される予定の党第19回全国代表大会に向けて、中国は内政重視の姿勢が強まっているが、今後、外交と内政のリンク・ポリティクス側面により一層注目しなければならないであろう。

NEARセンター研究員 **高 一**

2015年度以来、1974年から76年という短い期間における「朝鮮停戦協定体制の変容と北朝鮮の対応」というテーマについて、実証的研究に取り組んでいる。その作業の過程においてえられた知見は、昨年度の「回顧と展望」でも示したように、北朝鮮側の米韓側に対する軍事的脅威認識が非常に高まっていたということであった。2016年度には、このような研究テーマに加えて、北

朝鮮と非同盟諸国会議の関係についての分析を試みはじめた。

北朝鮮による非同盟諸国会議への加盟は、1975年8月に認められることになる。75年5月から6月にかけて、非同盟諸国会議をリードするアルジェリアやユーゴスラビアなどの国々を金日成主席自ら訪問するという経緯を経ての加盟であった。北朝鮮の加盟目的の一つとして、国連総会に向けて非同盟諸国の支持を結集しようとしていた点を指摘できる。実際に、75年の国連総会においては北朝鮮支持国による在韓米軍撤退決議が採択されており、この結果には非同盟諸国票が多く含まれていた。北朝鮮としては非同盟会議の結集力を在韓米軍撤退という政策目標実現につなげようとしていたのである。同年の国連総会においては、韓国支持国による在韓米軍維持を求める決議案も採択されたため、北朝鮮は翌76年にも、非同盟諸国の力を国連総会における決議案採択に利用することを試みた。しかしながら、1976年8月に板門店で米軍将校2名が北朝鮮兵士によって殺害される事件が起きることで北朝鮮への国際世論が悪化した。非同盟諸国を含む国際世論が悪化することによって、すでに上程されていた国連総会での決議案を北朝鮮側は9月に取り下げざるを得なくなる。非同盟会議を足場とした北朝鮮の対国連外交は76年に挫折することになった。

さて、本年度には、アメリカのカーター政権（1977年1月—1981年1月）に対する北朝鮮指導部の認識及び行動についての分析を進めてみたい。前述のように、国連総会の場合を利用しての在韓米軍撤退実現という北朝鮮の目標は挫折したのであったが、当の米国では、在韓米軍の撤収を公約として掲げて大統領選挙戦を制したジミー・カーターが77年1月に大統領に就任したのである。はたして北朝鮮指導部はカーター政権をどのように認識し、どのような対米接触アプローチをとったのだろうか。

NEAR センター研究員 **豊田 知世**

2016年度は、およそ以下の通り研究活動を行った。

- (1) 環境省の研究助成プロジェクト「低炭素・循環・自然共生の環境施策の実施による地域の経済・社会への効果の評価について」の研究分担者として参加した。地域資源である木質バイオマスを利用した地域経済および環境への影響について、国内外の大規模集中型の事例と小規模分散型の事例を比較した。研究成果は、来年度の環境経済政策学会にて報告したのち、研究成果の一部を書籍化して刊行予定である（2017年度刊行予定）。
- (2) 「木質チップを用いた地域熱供給システム導入の検証：学長裁量経費」では、国内外の木質バイオマス先進地域の情報収集、データ構築を行ったほか、島根県、岡山県、高知県への視察やヒアリング等を実施した。研究成果の一部は、山陰経済経営研究所の調査研究レポートに「地域活性化を目指す林業分野の取り組み」として寄稿した。
- (3) 「小さなブランド化の可能性調査：棚田米を事例にして：COCしまね地域教育・共創研究助成」では、浜田市旭町の坂本集落で栽培されている棚田米を対象に、共同研究者である松江Cの酒元誠治教授の協力のもと米の食味調査等を行った。この結果をもとに、中山間地域への新たなビジネスモデルの構築について考察を行った。研究結果の一部は、本学で実施された「地域と大学の共育・共創・共生に向けた縁結びプラットフォーム」第4回全域フォーラムで報告した。また、研究成果は取りまとめた上、来年度の地域活性学会にて報告する予定である。
- (4) 大学共同利用機関法人人間文化研究機構総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「貧困削減のための小規模分散型システムにおける水・エネルギー・ネクサスの社会的最適化」に参加し、ミャンマーのインレー湖周辺地域の住民実態調査に参加した。今後経済発展が見込まれるミャンマーにおいて、環境と地域経済の成長に寄与するエネルギーの需給構造やインフラ設備の在り方について検討した。来年度はアンケート調査を実施しながら、研究フレームワークを作成する。

現在私が取り組んでいる日本の過疎地域を対象に実施している持続可能なエネルギーの需給構造に関する研究と、開発途上国の無電化地域を対象に実施している、今後のエネルギー需給構造に関する研究は、いくつかの関連事項が見られる。今後は日本の過疎地域と開発途上国の開発現場をつなぐ視点から研究課題をみていきたい。

NEAR センター研究員 **前田 しほ**

2016 年度の研究活動。

1 海外調査：アルメニア・グルジアの戦争記憶調査 6月（2週間）

自己科研費基盤 (C) 「旧ソ連諸国の戦争記念碑比較研究」にてコーカサス地方の戦争記憶の調査を実施。

2 海外調査：ワシントン戦争記憶調査 11月（1週間）

科研費基盤 (B) 「社会主義文化における戦争のメモリー・スケープ研究」及び自己科研費基盤 (C) 「旧ソ連諸国の戦争記念碑比較研究」にて、社会主義圏の戦争記憶との比較調査のため、アメリカの首都ワシントンにおける戦争記憶の調査を実施。

3 研究発表：(Post-) Soviet Monuments as a Political Space: National History, Removal, and Affection, Around the Changbai mountains: A seminar on the narratives of the ethnic groups in Northeast Asia (ウラジオストク・極東連邦大学) 9月27日。IIAS (The International Institute for Asian Studies) 主催のセミナー形式の国際会議で、NIHU 北東アジア地域研究推進事業の各拠点から発表者が派遣され、鳥根県立大学からは前田が参加した。

4 研究発表：Чрезмерная маскулинность и отсутствие отцовского в Советском художественном произведении о великой отечественной войне (ソヴィエト戦争文芸作品における過剰な男性性と父性の欠如)、ロシア女性史学会第9回国際会議 (ロシア・スモレンスク、スモレンスク国立大学) 10月15日。

5 研究発表：The Representation of Soviet Homefront Women of the Great Patriotic

War and Patriotism: Propaganda Art and V. Rasputin's Live and Remember, The 48th Annual ASEES Convention (ワシントン、ワシントン・マリオット・ワードマン・パーク) 11月19日。

2017 年度の研究計画

1 科研費基盤 (C) 「旧ソ連諸国の戦争記念碑比較研究」によるウクライナ調査の実施と研究資料の整理と分析、またこれまでの調査とりまとめ

2 今年度採択された科研費基盤 (B) 「社会主義としての文化」の研究代表者として、初年度はプロジェクトチームのとりまとめと研究会の開催にとりくみ、研究組織活動に力をいれる

3 これまで研究発表は行ったが、業務に追われてまとめられなかった論文の執筆と発表

NEAR センター研究員 **ムンフダライ**

2016 年度の研究は、主として、アルタイ諸語の「華夷訳語」の漢字音訳方式に関する分析を中心に行った。「華夷訳語」とは、中国の明朝時代に言語の学習書として作られた、漢語（中国語）とその周辺諸言語との対音・対訳からなる文献である。本研究では、アルタイ諸語のモンゴル語、ウイグル語、女真語が扱われた「華夷訳語」を取り上げ、それらの漢字音訳方式の解明を目指した。2016 年度は、主に次の二通りの作業を実施した。

(1) ウイグル語が扱われた『畏兀児館訳語』の漢字音訳に関する研究成果の公開準備を進め、原稿の修正と校正の作業を実施した。本書は、自ら作成した『畏兀児館訳語』のウイグル語と漢語の平行コーパスに基づき、『畏兀児館訳語』の漢字音訳方式について考察し、且つ全巻に亘る音訳漢字一つ一つの対音と分布状況を提示したうえ、ウイグル語索引と漢語索引を完成したものである。本書は『『畏兀児館訳語』漢字音訳方式研究』というタイトルで、「第1部 漢字音訳方式の考察」「第2部 音訳漢字による対音と分布」「第3部 語彙索引」という3つの部分から構成されてい

る。なお、本書は2016年12月に内蒙古人民出版社（中国・内モンゴル自治区）より出版されている。

- (2) 女真語が扱われた『女直訳語』の漢字音訳に関する研究成果を取りまとめた。具体的には、自作した『女直訳語』の女真語と音訳漢字の平行コーパスを用いて、全1154語の音訳から成り立つ406種類の「女真語音：音訳漢字」の対応関係を抽出し、且つそのデータに基づき、漢字一字によって対応されている女真語の音連続に着目し、漢字音訳において、女真語の音連続の「頭子音」「母音」「末子音」が漢語音でどのように対応されたかについて考察した。また、『女直訳語』の音訳における女真語音と漢字の対応関係を「声母」と「韻母」に沿って整理し、音対応の基礎データとして示した。また、全テキストにわたって表記された302種の女真語音に対応する音訳漢字の種類を明らかにし、更に、音訳された語の中での全ての漢字の位置分布を確認し、そのデータを提示した。なお、この研究成果も書籍としてまとめる予定であり、引き続き、刊行に向けての準備作業に取り組んでいくつもりである。

NEAR センター研究員 **山本 健三**

2016年度は、「20世紀前半の北東アジアにおける相互扶助思想の展開」というテーマに対して、本学から学術教育研究特別助成金をいただいた。また、前年度より引き続き、科研費挑戦的萌芽研究「世界に向けた情報発信とその影響に関する分析を基盤にした日本アナキズム史の再構築」（研究代表：田中ひかる）に研究分担者として参加した。これらに基づき、国内外で調査を行った。

その成果として重要だったのは、ニコライ・ペトロフ＝パヴロフという革命家を見いだしたことである。彼はロシア革命後のロシアで活動したアナキストであり、モスクワにおけるアナキストの拠点だったクロボトキン委員会のメンバーとして足跡を残している。しかし、革命前に逃亡先の函館で数年間を過ごしていたことは、今回の調査で初めて知った。この経歴が重要な

のは、この人物が革命期のロシアと日本のアナキズム運動の結節点となっていた可能性があるからだ。実際、彼は大杉栄や高尾平兵衛らを尊敬し、日本のアナキストや社会主義者たちと親しく交流していたと述べている。このような人物の存在は、日本のアナキズムはロシア革命後のロシア・アナキズムに何らかの影響を与えたという仮説をも可能とする。

この調査の成果は、〈研究ノート〉「日本のアナルコ＝サンディカリズム運動と「大連流刑囚コミューン」— 亡命ロシア人ニコライ・ペトロフ＝パヴロフの回想」（『北東アジア研究』第28号、2017年3月）にまとめた。科研費は今年度が最終年度ということもあり、科研費メンバーの論文集を単行本として出版する企画が進行中である。それが実現できるように、国内外の図書館と図書館でさらなる調査を進めていきたい。

研究費に基づく研究活動以外での成果としては、やはり学位論文の書籍化が印象深い。『帝国・〈陰謀〉・ナショナリズム — 「国民」統合過程のロシア社会とバルト・ドイツ人』（法政大学出版局、2016年8月）がそれである。なお、出版後に2回ほど拙著の内容を報告する機会をいただいた（中央大学社会科学研究所公開研究会（2017年1月21日）、NEAR センター第7回北東アジア研究会（同2月9日））。ここに記して感謝申し上げる。

北東アジアの研究最前線 “ロシア革命100周年”

NEAR センター研究員 **山本 健三**

1917年、ロシアでは2月と10月（当時はユリウス暦。現代のグレゴリオ暦では3月と11月）に革命が勃発し、帝政ロシアが崩壊し、ボリシェヴィキ政権が成立した。今年はそのから100周年にあたる。ロシアでは革命記念日が祝日でなくなってから久しい。しかし、北東アジアは言うに及ばず、全世界を揺るがした革命だけに、今日でもロシア革命に対する関心は非常に高い。年内にロシア革命に関する数多くの学会やシ

ンポジウムが世界各地で予定されている。また、現時点（2017年6月末）で既に開催されたものもいくつかある。

ロシアで開催された主なものとしては、2017年1月26日に開催された学会「三つの革命の都市：20世紀のロシア革命100周年に寄せて」（於：サンクトペテルブルク・タヴリーダ宮殿。ロシア自由経済学会、ロシア科学アカデミー社会学研究所、同経済研究所、ロシア国民図書館、ロシア財政大学、ロシア国民経済アカデミー北西行政研究所、ロシア大統領府の共催）、3月29～31日に開催された国際学会「ロシア1917年革命100周年」（於：モスクワ国立大学。同大学歴史学部および政治学部、サンクトペテルブルク国立大学歴史研究所および政治学部、ロシア政治学会、ロシア歴史学会、ロシア科学アカデミー、ベラルーシ国民科学アカデミーの共催）、4月25～27日に開催された国際学会「ロシア革命の文献的遺産」（於：ロシア国立歴史図書館。同図書館、ロシア国立現代史中央博物館、ロシア国立社会政治史文書館の共催）などがある。

日本では、3月4日に開催されたシンポジウム「アナーキズムから見たロシア革命」（於：明治大学和泉キャンパス。初期社会主義研究会、関西アナーキズム研究会、科学研究費「世界に向けた情報発信とその影響に関する分析を基盤にした日本アナーキズム史の再構築」（挑戦的萌芽研究、研究代表者：田中ひかる）の共催）が今年最初のロシア革命関連の学術イベントである。登壇者のうち、ロシア研究者は筆者のみで、他の報告者は日本の社会主義運動の研究者であった。大半の報告は、日本人アナーキストのロシア革命観、あるいはロシア革命が日本に与えたインパクトに関するものであった。これ以降では、7月15日にユーラシア研究所主催のシンポジウム「さまざまにロシア革命—100年後のいま、ふり返る」、11月11日には史学会主催のシンポジウム「ロシア革命から20世紀史を考える」が開催されるようだ。

出版物においても、1月に出版された池田嘉郎『ロシア革命：破局の8ヶ月』（岩波

書店）を皮切りとして、ロシア革命・ソ連関連のものが目立つ。現在刊行中の『ロシア革命とソ連の世紀（全5巻）』（岩波書店）は、若手・中堅研究者が中心となって編纂されたという点で注目される。

最後に言及したいのが、『ロシア史研究』第99号（2017年5月刊行）に掲載された「ロシア革命百周年記念討論会」である。日本の様々な世代を代表するロシア・ソ連研究者である和田春樹、塩川伸明、松里公孝、宇山智彦、池田嘉郎、長縄宣博各氏が、自身のロシア革命観の変遷、研究史、研究動向などについて縦横無尽に語っており、非常に刺激的な討論会である。

NEAR Recommends

“自著を語る”

NEAR センター研究員 **ムンフダライ**

孟達来 『畏兀児館訳語』漢字音訳方式研究』（内蒙古人民出版社、2016年12月、236頁）

『畏兀児館訳語』は、中国の明朝時代に編纂された漢語（中国語）とその周辺諸言語との対音・対訳からなる「華夷訳語」という文献群の中の1種であり、その時代のウイグル語の研究と漢語（中国語）の研究にとって貴重な資料として知られている。本書は、自作した『畏兀児館訳語』のウイグル語と漢語のパラレルコーパスに基づき、『畏兀児館訳語』の漢字音訳方式について考察し、漢字音訳において形成された対音と対応関係の基礎データを提示したものである。本書は「第1部 漢字音訳方式の考察」「第2部 音訳漢字による対音と分布」「第3部 語彙索引」という3部から構成されている。

第1部では、まず、コーパスを用いた分析により、『畏兀児館訳語』の音訳において315種類の漢字が用いられていること、527種類のウイグル語音節が表記されていること、さらに、680種類の音対応が形成されていることを明らかにした。次に、ウイグル語の「声母（頭子音）」「母音」「音節末子音」が、漢字の「声母」「韻母」といった音韻構造の中でどのように表記されたかを分析し、その音対

応の枠組みを示した。更に、コーパス分析から得られた全 680 種類の音対応に基づき、漢字表記よるウイグル語音節の「声母への対応」「母音への対応」「音節末子音への対応」を考察し、それぞれの音対応について分析した。

第 2 部では、『畏兀兒館訳語』の音訳に用いられた 315 種類の漢字と、表記されたウイグル語音との対応を文節の中での位置に沿って網羅的に分析し、その結果を示した。

第 3 部では、『畏兀兒館訳語』に扱われた全 839 種類の対音・対訳の項目（文節）を整理し、ウイグル語を見出し語とした索引と、漢語を見出し語とした索引を作成した。

なお、本書は、筆者が研究代表者とする「科研費・基盤研究 (C)」の研究課題「アルタイ諸語の『華夷訳語』のコーパス構築と漢字音訳方式の研究」(2013 年 4 月～2016 年 3 月) の研究成果の一部を取りまとめたものである。

NEAR 短信

(2017年4月～2017年7月)

研究会活動

- 第 47 回日韓・日朝交流史研究会
【日 時】
2017 年 5 月 19 日(金) 16:30～18:00
【場 所】
講義・研究棟 2 階 会議室 B
【報告者・テーマ】
趙眞九氏 (高麗大学校グローバル日本研究院研究教授)「2015 年 12 月の日韓慰安婦合意と日韓関係」

- 北東アジア研究会第 1 回定例会
【日 時】
2017 年 6 月 13 日(火) 16:30～18:00
【場 所】
講義・研究棟 2 階 会議室 A
【報告者・テーマ】
梁雲祥氏 (北京大学国際関係学院教授)「中国周辺外交と中国新時期外交における日本の位置」

- 北東アジア研究会第 2 回定例会／第 48 回日韓・日朝交流史研究会

【日 時】

2017 年 7 月 28 日(金) 16:30～18:00

【場 所】

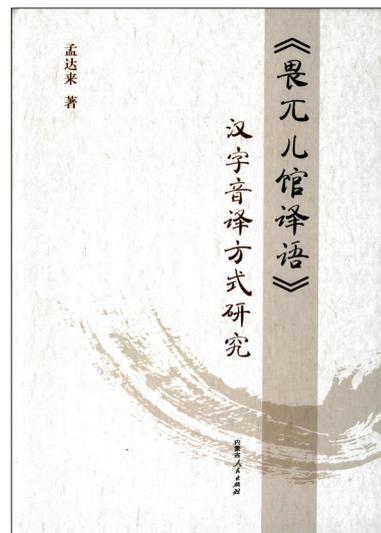
講義・研究棟 3 階 大演習室 2

【報告者・テーマ】

陳昌洙氏 (世宗研究所所長)「東北アジア秩序と韓日関係」

研究員の研究活動の成果

- ※ムンフダライ研究員の単著である孟達来『『畏兀兒館訳語』漢字音訳方式研究』(内蒙古人民出版社、2016 年 12 月) が出版されました。今号の NEAR Recommends では自著を語っていただいていますので、是非ご一読下さい。



NEAR センター市民研究員の活動一覧

(2017年4月～2017年7月)

- 2017 年度第 1 回 NEAR センター交流懇談の集い開催
【日 時】
2017 年 4 月 15 日(土) 13:00～16:00
【場 所】
島根県立大学浜田キャンパス交流センター 研修室

【内 容】

井上厚史 NEAR センター長挨拶、NEAR センター概要と研究員制度説明、NEAR センター研究員紹介、参加者の自己紹介、グループリサーチサロン／共同研究の情報交換など。

○2017年度第2回 NEAR センター交流懇談の集い開催

【日 時】

2017年4月22日(土) 13:00～16:00

【場 所】

島根県立大学浜田キャンパス交流センター研修室

【内 容】

福原 NEAR センター副センター長挨拶、NEAR センター概要と研究員制度説明、NEAR センター研究員紹介、参加者の自己紹介、グループリサーチサロン／共同研究の情報交換／NEAR センター研究院との共同活動検討など。

○2017年度第1回市民研究員全体会の開催

【日 時】

2017年5月20日(土) 13:15～17:00

【場 所】

島根県立大学浜田キャンパス交流センター研修室

【内 容】

清原正義学長・井上厚史 NEAR センター長挨拶、NEAR アカデミック・サロン（講師：井上治 NEAR 研究員「河南モンゴル人の歴史と文化について」、サンダグゴンボ氏（新ウハムスル協会）「中国青海省・河南モンゴル族自治州（河南蒙旗）モンゴル語文化研修クラスの取組について」）、参加者（NEAR 研究員、市民研究員、大学院生）自己紹介、記念撮影、グループ・リサーチ・サロン／共同研究の情報交換、施設案内（希望者）

○第1回市民研究員研究会の開催

【日 時】

2017年7月15日(土) 14:00～17:00

【場 所】

島根県立大学浜田キャンパス講義研究棟
1階 中講義室3

【内 容】

井上厚史 NEAR センター長挨拶、第1部：アカデミック・サロン（講師：濱田泰弘 NEAR 研究員「地方自治体議会存続の危機—高知県大川村『町村総会』設置検討をめぐる問題」、大学院生と市民研究員の共同研究助成事業審査結果発表、2016年度島根県立大学 NEAR センター市民研究員制度に関する意識調査中間報告。第2部：市民研究員による研究発表…岡崎秀紀市民研究員「チベット仏教求法僧・能海寛の第二次探検ルート」、小林久夫市民研究員「イスラム教シーア派に関する一考察」、田中文也市民研究員「日本書紀1300年を目指して：北東アジア地域古代史研究の新局面」

○2017年度 NEAR センター市民研究員と大学院生の共同研究助成事業に3件の研究課題が採択されました。

- ・左暁晴（大学院生）／湯屋口初實・河野美里（市民研究員）「中国における移民社区の共棲・共生実態研究—煙台の韓国人社区を事例に」
- ・石楊（大学院生）／岡崎秀紀（市民研究員）「環境支払意思額により新退耕還林政策を導入する可能性に関する研究—ホルチン砂地におけるフシン市を事例として」
- ・田中幹人（大学院生）／湯屋口初實・牛尾昭・大橋美津子（市民研究員）「上海市及び浜田市の友好都市真如鎮におけるニーズ調査と浜田地域におけるインバウンド戦略について」

NEAR News 第52号

2017年10月発行

【編集発行】

島根県立大学北東アジア地域研究センター
〒697-0016

島根県浜田市野原町2433-2

Tel 0855-24-2375

Fax 0855-24-2383

E-mail: near-c@u-shimane.ac.jp

ホームページ: <http://hamada.u-shimane.ac.jp/research/organization/near>